

【一般演題3】 第13席 『『靈枢』骨度篇にみる数理的構造についての一考察』

京都 稲垣 元

骨度は『靈枢』第十四篇「骨度篇」としてまとめられている。現在に至るまで様々な体系を持った経穴学や選穴の手法が歴代現れるが、それらはみなこの骨度を基準に置いて成立している。しかし、時代を経るに従いこれに誤謬が混入しているのも事実である。また現在の経穴学は骨度篇に対して不統一であり、必ずしもその分寸に従ってはいない。しかも後人の様々な説が混入して非常に混乱しているのが現状である。

歴代の研究成果を概観した結果、骨度篇をみる視点に二つの立場が有ることがわかった。ひとつは骨度篇に記載されている値は、多数の実測経験の積み重ねによってその平均的な値の集大成、もしくは当時の政治的指導者の身体の寸法をとったとみる実験起源説の立場である。この証左として古代の尺度を現在のメートル法に換算して現代人の人体と比較した場合の値が実際に大きく隔たっていないこと、また解剖学的にみて、ある部位の身長に対する比率は、やはり非常に実物のそれに近いこと、出土する古人骨などの実測値と近い値であること、などが挙げられる。これに対して、もうひとつこれを必ずしも実測値に基づくものではないとする、人体を小宇宙と見立て、数理的合理性を基に構成された値であるとする立場がある。歴代中国の律暦思想などに見えるように、天地にはそれを一括して貫くひとつの法則性があると考えられてきた。この法則性は、音律を基にして暦・度量衡を制定する段階において、それがひとつの数理的合理性のもとにその論拠をおいていたという事実からもわかるように、世界を総て貫く絶対的な法則として、哲学思想の内に受け入れられていたらしい。この数理的合理性に貫かれた思想のもとに、この世界観はもちろん医学の分野にもその影響を落としている。『黄帝内經』がそれぞれ八十一篇の二書からなることをはじめ、「九鍼十二原」など非常に示唆的な「数」がその理論体系中に現れる。この背景にはある数理的合理性のもとに組み立てられた世界観の存在を感じずにはいられない。以上のような観点から骨度篇にみえる数理的構造について考察を加えてみたい。